

長野県更埴市 屋代遺跡群

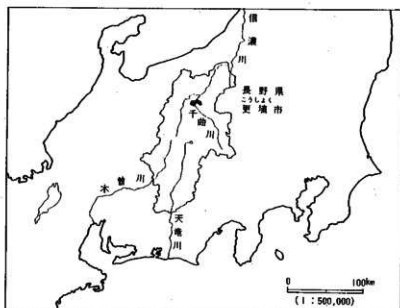
町 浦 遺 跡 II

大東建託(株)倉庫建設に伴う発掘調査報告書

1998

更埴市教育委員会





例言

1 本書は、田澤佑一氏から委託を受けた更埴市教育委員会が、平成9年度に実施した大東建託備倉庫建設に伴う町浦遺跡発掘調査報告書である。

2 本書の執筆・写真撮影は担当者が行い、実測は国光一穂と担当者が行った。

3 本書中の方位は、平面直角座標系第Ⅷ系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。

4 本書中の表現は下記のとおりである。

焼土  炭化物 
 赤色塗彩  断面黒塗りは須恵器
 黒色処理 

5 本調査に伴う、出土遺物・実測図・写真等の資料は、全て更埴市教育委員会が保管している。

なお、出土遺物には、町浦遺跡を略し「MTU」と表記した。

目次

例言・目次

第1章 調査の概要	1
第1節 概要	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	2
第3章 遺構と遺物	5
弥生時代	5
古墳時代	5
奈良時代	6
平安時代	7
その他の遺物	10
第4章 まとめ	11

住居跡一覧表
写真図版

第1章 調査の概要

第1節 概要

1	調査遺跡名	屋代遺跡群 町浦遺跡 (市台帳No.31)
2	所在地及び 土地所有者	更城市大字雨宮字町浦412-4 田澤佑一
3	原因及び 事業者	民間事業=倉庫建設 田澤佑一
4	調査内容	発掘調査 調査面積 約400㎡
5	調査期間	平成9年8月20日～9月25日
6	調査費用	1,860,000円
7	調査主体者	更城市教育委員会
	担当者	佐藤信之 更城市教育委員会
	調査参加者	猿渡久人 春日有子 金井順子 国光一穂 久保啓子 小林昌子 高野貞子 富沢豊延 中村文恵 堀内広人 宮崎恵子
	事務局	西巻 功 下崎雅信 佐藤信之 小野紀男 宮島裕明
	種別・時期	集落跡 弥生時代～中世
	遺構・遺物	古墳時代 竪穴住居跡 2棟 奈良・平安時代 竪穴住居跡 10棟 掘立柱建物跡 2棟 中世 墓 2基 出土遺物 コンテナ10箱

第2節 調査の経過

平成9年6月、田澤佑一氏から雨宮に倉庫の建設を計画しているとの連絡があった。市教育委員会では隣接地で、埋蔵文化財が確認されていることから、建物の基礎が包含層に達するようであれば発掘調査が必要であると伝えた。7月4日、試掘調査を実施した結果、現在の地表から約80cm下に包含層が確認されたため関係者に報告した。当初、基礎を浅くして埋蔵文化財に直接影響を与えないよう設計を行う予定であったが、地盤が軟弱であるため、地盤改良が必要となり、発掘調査を実施して保護にあたることとなった。

7月24日、埋蔵文化財発掘の届出があったため、発掘調査を実施するよう意見書を添付し提出した。8月20日、田澤佑一氏と更城市長の間に委託契約が締結され、発掘調査に入った。9月25日、現場における調査を無事完了した。

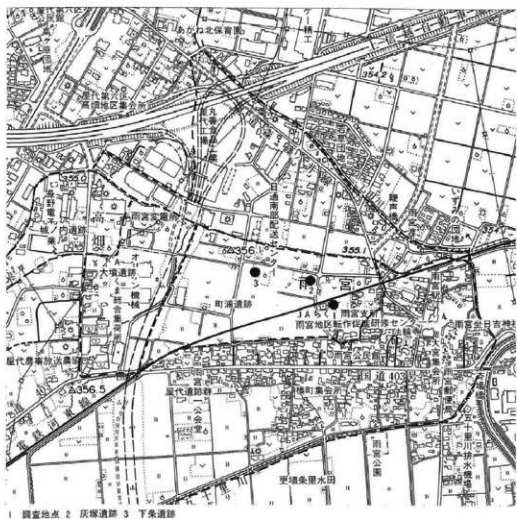
第3節 調査日誌

- 平成9年8月20日 午後から重機入り表土除去始める。
- 21日 作業員入り遺構検出開始。
- 26日 最初の住居跡検出し、掘り下げを始める。
- 27日 中世の墓より、人骨2体検出。
- 9月2日 2号住居跡掘り下げ完了し、写真撮影。
- 10日 東京学芸大学木下正史教授現場視察。
- 11日 12号住居跡から屋代寺瓦の破片出土。
- 16日 台風19号の影響で雨となり作業中止。
- 19日 全体写真を撮影。
- 24日 掘立柱建物跡の掘り下げを行い、掘り下げ完了。
- 25日 残っていた実測作業を行い、現場における作業は完了とする。

第2章 遺跡の環境

町浦遺跡は、更埴市大字両宮字町浦に位置し、大きく屋代遺跡群として包括されている。遺跡群は千曲川によって形成された自然堤防上に位置しており、標高355m前後で東西2.5km南北1km程の広がりを持っている。また遺跡群の西側は粟佐遺跡群へと続いており、東西3kmにわたって展開する大遺跡群となる。遺跡群内にあつて町浦遺跡、大境遺跡、城ノ内遺跡はほぼ中央を占めており、ほとんど切れる部分がなく集落が展開している。大きく捉えれば一連の遺跡であり、現在までの調査成果から遺跡の広がりを把握することには無理があり、便宜上字名により遺跡を区分している。上信越自動車道建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって平成6年に実施された調査では、多量の木簡が出土し、これらの遺跡内に官衙が存在した可能性が極めて高くなり、遺跡の重要性は、さらに高まった。

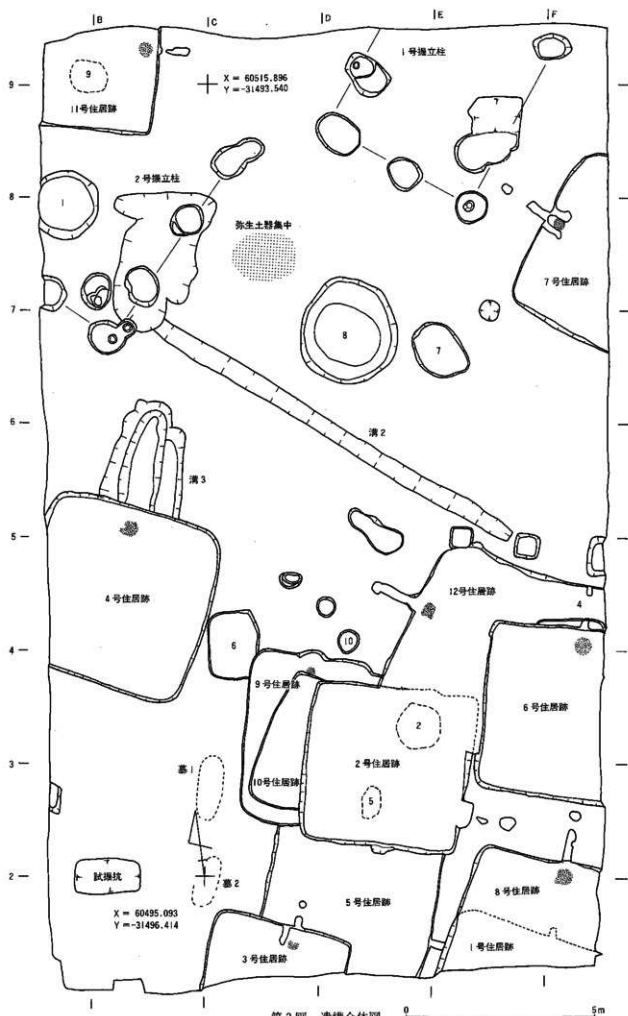
町浦遺跡では、平成7年から調査が実施されている土ロバイパスの調査を除き、3か所の調査が行われている。昭和44年に調査が実施された下条遺跡、灰塚遺跡も町浦遺跡内に位置している。ほ場整備前の地籍名を遺跡名としていたが、ほ場整備により地形が変化したため、どの地域を示すのが明確でなくなったため、現在は町浦遺跡として把握している。この調査では4世紀の良好な土器群が出土している。また平成7年には、今回の調査の南側が調査されており、平安時代の住居跡が検出されている。



第1図 遺跡位置図 (1 : 10,000)



第2図 調査風景



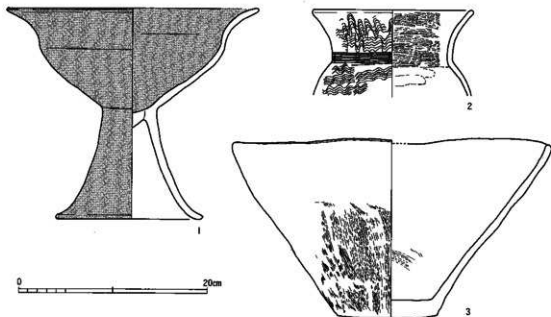
第3図 遺構全体図

第3章 遺構と遺物

1 弥生時代

遺構は検出できなかったが、遺物は8号土坑の北側からまとまって出土している。出土位置が平安時代の住居跡の検出面とほぼ同じであることから、地形の変化はほとんどなかったと思われる。

1は赤色塗彩された高杯で、頸部から大きく外反して口縁端部に至る。脚部に透かしはない。2は



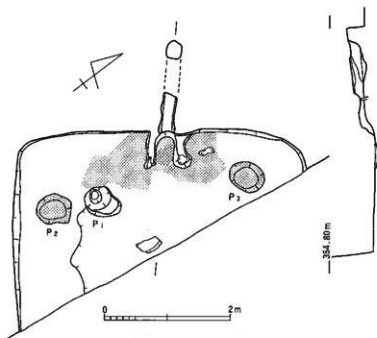
第4図 弥生時代の土器

甕で、櫛描波状文を施した後頸部に縹状文を施している。3は作りの荒い大型の鉢である。

2 古墳時代

7号住居跡

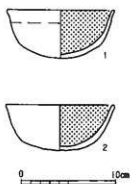
構 造：遺構の東側が調査区外にあるため、詳細は明らかではないが、一辺4.50m程の隅丸方形の住居跡で主軸をN-55°-Wに持つと思われる。カマドは西壁中央に作られており、両袖の先



第5図 7号住居跡

端には河原石が立てられている。火床は良く焼けていて、煙道が1.4m程伸びている。床面は顕著であり、南壁から約1m程入った部分に僅かの段差があり、南側が高くなっている。P₁は主柱穴と考えられるが、P₂・P₃は深さ15cm程で、覆土が焼土と炭化物であることから柱穴とは考えにくい。

遺物：出土遺物は少ない。長胴甕の破片なども出土しているが、小片で図示できない。1・2は土師器の杯で、底部はヘラケズリの後覚いミガキが施されている。

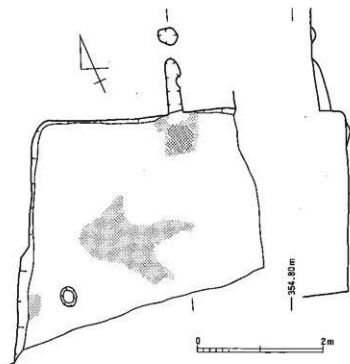


第6図 7号住居跡出土遺物

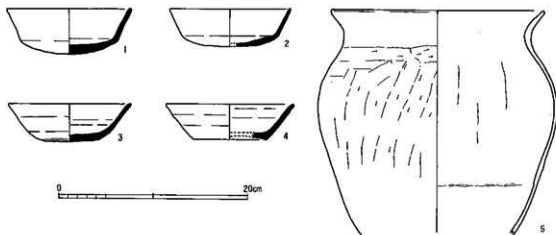
3 奈良時代

8号住居跡

構造：調査区南西隅での検出であり、西壁や床面をほぼ同じくする1号住居跡に南側を切られているため、規模は不明であるが、カマドが壁の中央に作られているとすれば、一辺4.5m前後の方形の住居跡と考えられる。壁高は最大55cmで主軸はN-20°-Eに持つ。カマドは北壁に作られているが、すでに大半が壊されており、良く



第7図 8号住居跡



第8図 8号住居跡出土遺物

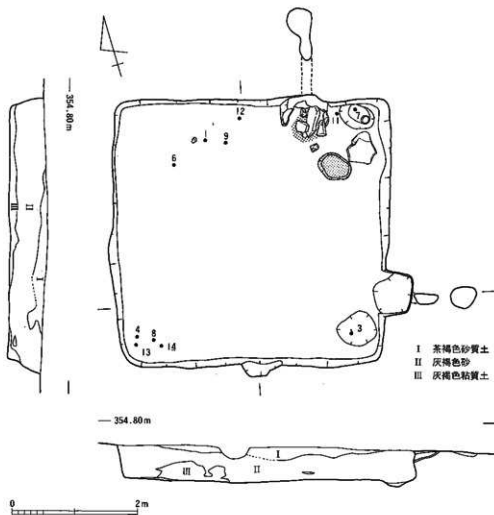
焼けた火床と1.4m程伸びた煙道を検出したにすぎない。床面は良く締まっており、中央付近には炭化物層が広がっていた。

遺物：出土遺物は少ない。1～4は須恵器の杯で、底部は1がヘラオコシで2～4は糸切りと思われるが、2はナダ3はヘラケズリで調整している。1・2は体部下半に明瞭な稜をなす。5は北武藏型の甕である。

4 平安時代

2号住居跡

構造：覆土が仁和の砂層であり、検出された住居跡の中で最も新しい。東西4.20m南北4.05mとやや東西に長い方形で、最大壁高55cmを測ることができる。主軸をN-15°-Eに持ち、カマドは北壁東寄りに、僅かに突出して作られた石組粘土製で遺存状態は良い。袖には厚さ10cm程の角柱の石を東側に3石、西側に2石立て、外面を粘土で覆っている。また天井部は同様の平石を焚き口部分と煙道との接点部分に乗せ、中央部を懸け口としている。火床は良く焼けており、火床北側に支脚が立てられている。煙道は約1.4m伸びて煙り出しとなる。カマドの東側には、深さ15cm程の楕円形の掘り込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。また、その南側には平石が設置されている。更に、焚

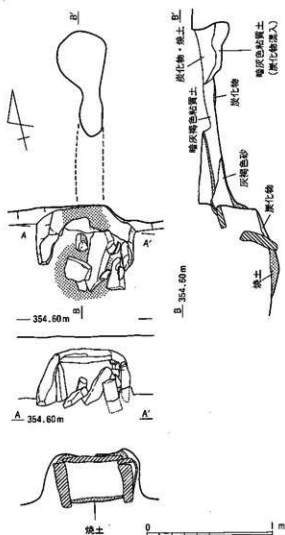


第9図 2号住居跡

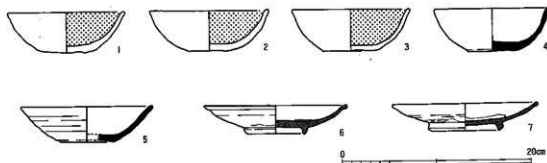
き口の南東には覆土に炭を持つ深さ5cm程の掘り込みがあり、カマドの灰・炭を掻き出す施設と考えられる。

東壁南寄りにも壁を40cm程掘り込んでカマドが作られており、1m程伸びた煙道も確認できる。おそらく最初に東壁にカマドが作られ、その後北壁に移したものと思われるが、埋めた痕跡はなくそのままの状態であったものと思われる。北側のカマド同様に南側には、深さ10cm程の掘り込みが見られる。

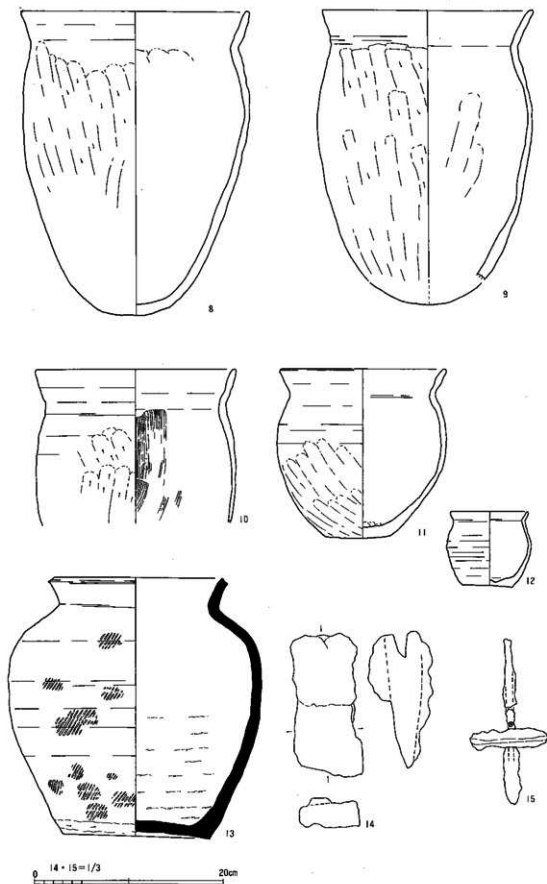
遺物：遺物はカマド付近と南西隅の床面付近に集中しており、完形に近いものが多い。1～3は内面黒色処理された杯で、1・2の底部は糸切りの後、手持ちのヘラケズリを施している。4・5は須恵器の坏であるが、焼成が悪い。6・7は灰雑陶器の皿で、6はハケ塗り7は横掛け施釉されており、共に重ね焼きの痕跡がある。8～12は土師の甕で、8・9は丸底で、共にロクロ調整の後胴部にヘラケズリを施している。10も同様の甕であるが、焼けた粘土が付着しているため、カマドの構築材として使用されていたものと思われる。11は平底でロクロ調整の後胴部下半にナデを施している。12はロクロ成形された小型甕で底部に糸切り痕を残している。13は須恵器の甕で平行叩きの後ナデを行っている。内面では粘土の巻き上げ痕が観察できる。出土遺物にはこの他に4点の鉄製品がある。14は鉄斧であるが錆びに覆われており、詳細は不明であるが、長さ約11cmで刃部が斜刃になる。図示していないがもう1点はほぼ同じ長さの鉄斧が出土しているが錆に覆われており形状は明確でない。15はカマド内から出土した紡錘車である。他に刀子の破片や釘状の鉄製品も4点出土している。



第10図 2号住居址カマド



第11図 2号住居跡出土遺物 1



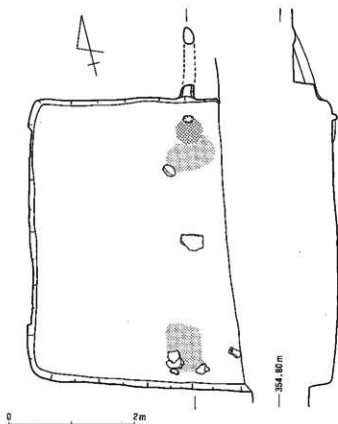
第12图 2号住居跡出土遺物 2

6号住居跡

構造：東側が調査区外にあるため全容は不明であるが、南北4.45mの方形で、主軸をN-15°-Eに持つ。カマド付近は4号土坑に切られているが、最大壁高は南壁で50cmを測ることができる。北壁に作られたカマドはすでに大半が破壊されていたが、火床と煙道は残っていた。火床北側には支脚を立てた掘り込みも検出されている。床面は平坦でカマド付近は良く締まっていた。

遺物：出土遺物は比較的多かったが、小破片が多く復元できたものは少ない。ロクロナアの後胴部にヘラケズリを施す筥や、頸部が「コ」の字状となる北武藏型の甕も含まれていたが、図示できなかった。1-6は須恵器の杯で底部には糸切り痕を残している。

7は刀子と思われる鉄製品であるが、切先と基部を欠いている。

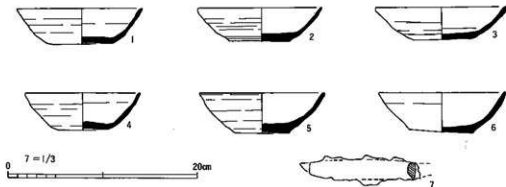


第13図 6号住居跡

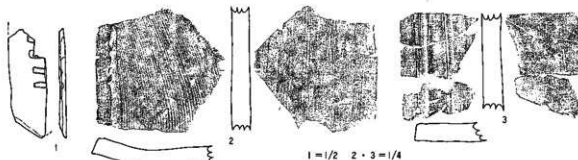
5 その他の遺物

グリッドからの出土遺物は、まとめて出土した弥生時代の遺物を除けば、非常に少ない。特殊な遺物として、土骨と布目瓦がある。

土骨は、平坦な骨の表面を残し、厚さ3mm程の短冊状に整形し、骨の内面側に長方形の彫り込みを施したもので、生仁遺跡や現在調査中の屋代遺跡群などから出土している。生仁遺跡出土の物は、長方形の彫り込み内に十字形の焼痕がついているが、今回出土した物にはなく、使用前の土骨と思われる。屋代遺跡群の出土遺物から、古墳時代終末から奈良時代の遺物と考えられる。



第14図 6号住居跡出土遺物



第15図 その他の遺物

布目瓦は、周辺の遺跡から出土しているいわゆる屋代寺瓦で、凸面はケズリとナデによって整えており、叩きの痕跡は確認できない。凹面にはナデが施されているが、布目痕を僅かに残している。また凹面の側面は面取りが行われている。

第4章 まとめ

今回の調査地点は、平成7年から調査が実施されている土ロバイパス建設に伴う屋代遺跡群の調査地点から、約100m南に寄った部分であり、平成7年には隣接地が調査されている。

調査の中で特出するものとして、2号住居跡の検出がまず上げられる。更埴条里水田並を覆う砂層は、仁和4年(888年)の大洪水によるものと考えられているのは周知のとおりであるが、雨宮地区の自然堤防上ではこの砂層の存在が明確ではなかった。そのため、この洪水が雨宮地区の集落に与えた影響(被害)については不明点が多かった。2号住居跡の覆土は、この砂層と周辺の水田から流れ込んだと考えられる灰褐色の粘土層であり、カマドもほとんど原形のまま残っていることから、一気に埋没したものと思われ、また遺物の出土状態もそれを証明している。このことから雨宮地区の集落もかなり影響を受けたと考えられる。現在この砂層が確認できないのは、その後の水害等で流されたものと考えられる。

また2号住居跡からは、鉄斧2点、紡錘車1点、刀子1点のほか、釘状や板状の鉄製品が3点出土している。今回の調査で検出された住居跡のうち、金属器が出土した住居は4棟で、1点から2点の出土であった。他の遺跡での検討は行っていないが、おそらくほぼ同様な割合が得られるように思われる。鉄斧2点を含む7点の出土は、特に集中した住居といえるが、これは集落内において限られた住居にみられる傾向であるのか、あるいは、洪水といった突発的な埋没であったため、持ち出されずに残ったのか、興味深いところである。

遺構の検出はなかったが、弥生時代の遺物がまとめて出土したことから、調査地点は弥生時代からすでに集落として利用されていたと理解される。

屋代遺跡群内の弥生時代の住居跡は、千曲川によって形成された自然堤防上では、北側縁辺部に集中するのに対して、沢山川の影響を受ける自然堤防上では、ほぼ全体に広がっている。これは千曲川によって形成された自然堤防の北側が流失し、南側に新たに堆積しているのに対して、沢山川によって形成された自然堤防はほぼ当時の形成を残しているためと考えられる。今回の調査地点は、千曲川と

沢山川両者の影響を受けたと考えられる部分であるが、調査結果から見れば、弥生時代にはすでに自然堤防が形成されていた地域といえる。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解と、ご協力を頂いた田澤佑一氏ならびに関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

住居跡一覧表

住居跡 No	時代	形態	規模 (m)	主軸方向 (長軸)	主な出土遺物	備 考
1	平安	方形	不 明	N-25°-E	土師杯・須恵長頸壺	5・8住<新
2	平安	方形	4.20×4.05	N-15°-E	詳細本文中	5・9・10・12住<新
3	平安	方形	3.65×	N-20°-E		5住<新
4	奈良	隅丸方形	4.60×4.60	N-25°-E	須恵杯	
5	平安	方形	4.45×	N-105°-E	須恵杯・灰釉碗	2・3住<古 9住<新
6	平安	方形	4.45×	N-15°-E	詳細本文中	12住<新
7	古墳	隅丸方形	4.50×	N-70°-E	詳細本文中	
8	奈良	方形	不 明	N-20°-E	詳細本文中	1住<古
9	平安	方形	4.45×	N-20°-E	須恵高台杯	2・5・10住<古
10	平安	方形	3.55×	不 明		2住<古 9住<新
11	平安	方形	不 明	N-105°-E	土師高台碗	
12	古墳	隅丸方形	不 明	N-60°-W	長胴甕	2・6・9住<古



調査区全景
南側より



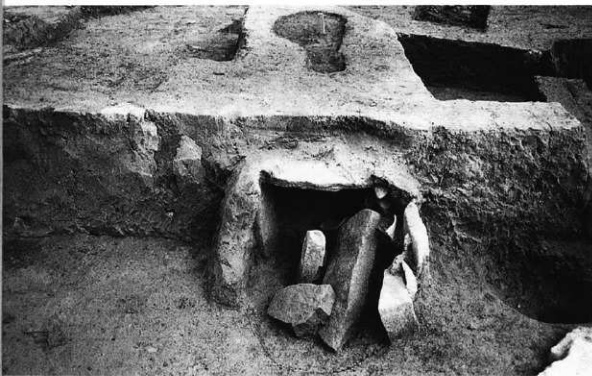
7号住居跡
南側より



8号住居跡
西側より



2号住居跡
南側より



2号住居跡カマド
南側より



6号住居跡
南側より

弥生時代の遺物



1



3

7号住居跡出土遺物

8号住居跡出土遺物



1



2



1

2号住居跡出土遺物



1



2



3



4



6



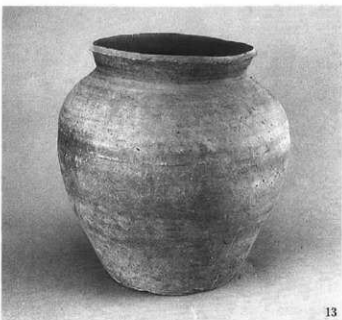
7



8



9



14



15

6号住居跡出土遺物



その他の遺物



報告書抄録

よりがな	やしらいせきぐんまちうらいせき							
書名	歴代遺跡町道遺跡Ⅱ							
副書名	大東建託 倉庫建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	佐藤信之							
編集機関	更城市教育委員会文化課文化財係							
所在地	〒387-8511 長野県更城市杭瀬下84			Tel 026-273-1111				
発行年月日	1998年3月31日							
よりがな 所収遺跡	よりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おしろ 町 浦	おしろ 町 浦 長野県 更城市 大宇雨 宮字町 浦 412-4	20216	31	36	138	19970820 ~19970925	400	大東建託 倉庫建設 に伴う 発掘調査
				32	8			
				41	53			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
町 裏	集落跡	古墳時代	竪穴住居 2棟		土師器、須恵器、灰輪 陶器、鉄弁		古墳時代から平安時代の 集落跡 仁和4年(888)の洪水 で埋没した住居跡検出	
		奈良・平 安時代	竪穴住居 16棟					
		中世	掘立柱建物・ 土坑墓 2基					

町浦遺跡Ⅱ 大東建託倉庫建設に伴う発掘調査報告書

発行日 平成10年3月31日
 発行 更城市教育委員会
 〒387-8511 長野県更城市杭瀬下84番地
 電話 (026)273-1111
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037 長野県長野市西和田470
 電話 (026)243-2105
